シンポジウム II「様々ながん統計の活用事例」

宮代 勲　JACR理事
大阪国際がんセンター　がん対策センター

日本医師会との共催シンポジウム「がん統計の活用と未来」が、令和元年11月17日に日本医師会館大講堂で開催された。座長を担当したシンポジウムII「様々ながん統計の活用事例」について報告する。「がん登録データ利用の未来」、「ゲノム診療時代のがん臨床データベース」とともに、3つのシンポジウムで構成されていた。

シンポジウムIIでは、国際医療福祉大学大学院医学研究科の石川ベンジャミン光一先生に「DPCデータから見るがん診療の実態」、慶應義塾大学医学部医療政策・管理学教室の高橋新先生に「National Clinical Database（NCD）における臓器がん登録」というタイトルで講演いただいた。

全国の病院の約半数で作成されている診療群分類包括評価（DPC）データはわが国で最も活用が進んだ医療ビッグデータといえる。国内の大規模医療データベースにおけるDPCデータの位置づけ、個票データの分析から結腸がん手術の診療プロセスと費用、DPCオープンデータの活用例として地域における肺がん治療体制の分析という3つの内容について、全国がん登録等の保健医療分野の主なデータベースの状況、DPCデータではできないことと将来的な解決の道筋を含め、わかりやすく説明いただいた。

NCDは外科手術の95%以上をカバーするとされ、専門医制度と連携した臨床データベースとしては世界最大規模である。NCDおよびNCD上で行われている臓器がん登録の現状、研究事例としてリスクモデルとフィードバック、連携事例として製薬企業が行う各種調査データを学会側およびNCDとの連携によって評価を行う仕組みについて紹介いただいた。

DPCとNCDの2つのテーマに関する会場参加者の関心も高く、質疑応答の時間が不足しがちと、座長としては嬉しい悩みが生じたシンポジウムであった。

シンポジウム III「ゲノム診療時代のがん臨床データベース」

田渕 健　JACR理事
東京都立駒込病院

国立がん研究センターがんゲノム情報管理センター（C-CAT）副センター長の吉田 輝彦先生に、『C-CATにおけるがんゲノム情報』というテーマで、国立がん研究センター中央病院乳腺・腫瘍内科/先端医療科の米盛　勧先生に、『レジストリデータの活用方法~MASTER KEY~』というテーマで、それぞれ講演していただきました。吉田先生はゲノム診療という視点、米盛先生は希少がんという視点でそれぞれのレジストリを通して、データの活用の方向性を語っていただきました。吉田先生には、個別の疾患では少しずつ明らかになり、一部臨床にも応用されているゲノム情報を統合的な情報として集積することの重要性と網羅的に収集するゲノム情報の品質の担保について話していただきました。米盛先生には、がん医療におけるレジストリデータの活用の意義についてと希少がんにおけるMASTER KEYプロジェクトの実践活動について話していただきました。レジストリデータは、後方視的観察研究として扱われることが多かったため、前方視的臨床試験よりもエビデンスレベルが低く見られがちでしたが、よくデザインされた臨床試験でも捕捉できないような希な疾患や現象、究極的には個々人のレベルの事象を現実のリアルワールドデータによって捉え、レジストリデータ自体あるいはレジストリデータを手がかりに新たな臨床試験を行うことによって新たなエビデンス構築をするための有用な貴重なリソースであるという視点は、全てのレジストリに共通認識となると考えられます。国内でも数多くのレジストリが存在しており、歴史の長いものもあるようです。全国がん登録は『情報の提供』という形で利活用の促進が始まりましたが、様々なレジストリの相互補完的な繋がり（リンケージなどを通じて）により、新たなエビデンス構築の可能性が秘められていると感じられるセッションでした。